

江 別に住んで14年経ちますが、実は私、同じ場所にこんなに長く住んだのは初めてなんです。

子どもの頃は、家庭の事情で釧路管内を転々とするのが常でしたし、転勤族の夫と結婚してからも、ずっと腰の落ち着かない生活をしていました。子ども達の高校受験を機に家を建てようとなって、フットワークの良い土地を探して、江別に決めました。

10年以上住むと不思議なもので、頭の中にもう一つ街ができてくるんです。

いつ頃雪が降って、積もって、とけて。緑がこの辺りで出てくるな、クロッカスが3月の雪解けのときに出てくるな、6月にはこの花が咲くはず……といった、舞台設定がきれいに頭の中に揃ってくるんです。

住んだことのない土地を舞台に書くときは、そこに住んでいる人に頼るといふか、いそうな人を書きがちなんです。が、実際に住むと「そこに似合う人」を設定できるようなるんです。お話を作っていくときに、実際には存在しない違和感が生じてしまうからと聞きました。

小説もそれと同じで、虚構の世界を違和感なく描くために、私の体験という生モノはしっかり加工するようにしているんです。

「砂上」や「家族じまい」など、江別が舞台になった作品はどのように生まれたのでしょうか

「砂上」の時は全員が嘘つきというのがテーマでした。でも、それって紛れもなく、日常を連れて来るんですよ。このお話のリアルな部分は「全員が嘘つき」などころかな。

登場人物を書くにあたって楽しみだったのが、私と同じ仕事をするようになるであろう人を書いたことです。自分の中のものやもやとした部分をちょっと見せなければならぬ、書いても恥、書けなくても恥だと、楽しみつつもちょっとプレッシャーがありましたね。

作中に出てくる小説に対する考え方というのは、どちら

い登場人物を自然に動かせる。これは大きいですね。

実際にどうやって物語を作っていくのですか

小説の執筆というのは『自分を知る作業』だと思います。たとえば作り上げた虚構のキャラクターが江別のまちを動く時に、こういう生い立ちをした人はここで何を思うか

特別
インタビュー

江別に住んでいるから
書ける物語がある

桜木紫乃さん

江別市在住・直木賞作家

江別市など北海道を舞台とした作品を多数執筆されている桜木先生。江別市に住んでみて感じたことや江別を舞台にした作品の制作の裏側について伺った。

なっている事を考える。今ここにいないその人を想像で描くことによって、自分の内面と向き合う作業です。

物語の主人公の隣で透明人間になって物事をみて、現実と虚構の間をユラユラしながら人間と出来事を掘り下げていく、というのが創作というものではないかなと思います。それがきちんと塩梅良くできたときに良いものになっ

ているような気がします。文章を書かない日もあります。が、原稿のことが頭から離れることはないですね。次に何が出てくるかはその時まで分からないので、現実と虚構の間に、意識をずっとユラユラさせておいて「あ、来た」と思ったときに、ぱっと物語を捕まえられるように、穏やかにニユートラルな気持ちで生活したいなと思っています。

私にとってはそれが一番、必要な事なんじゃないかと思っています。

先生の作品はフィクションですが、まるで親戚の話の聞いているような、とてもリアルな印象を受けます。

虚構をリアルと感じてもらえるように作っているんです。リアルを追求していますと「ご自身の体験ですか」とよく聞かれるのですが、見た物や聞いた物が役に立つことはあっても、私の体験をそのまま使わないですね。

私は「経験が書かせる経験なき一行」が、小説なのかなと思うんです。私の経験をそのまま使ってしまうと虚構のなかに「生モノ」が入って来ってしまう。

たとえば、宝塚歌劇団の舞台では小道具のガラスコップひとつとっても、必ず木で作った張りぼてをガラス風に細工して使っているんだそうです。なぜガラスのコップを使わないのかというと、(宝塚の世界の中に突然)リアルなものが入ってくると、そこ



かという編集者寄りです。常々、自分に言い聞かせながら書いていることを少しづつ入れたのと、デビュー前に編集者から言われた言葉も二、三言入っていますね。

たとえば『ことほどかように』ね。これは独りよがりな文章を書いていると、それでは何も伝わらないと実際に担当編集者に鉛筆を入れられた

ところですが、生まれてはじめて聞きました。一生忘れられない言葉です。

「家族じまい」は、「ホテルロイヤル」のその後です。

「ホテルロイヤル」はラブホテルを舞台に、そこに関わる人の時間をさかのぼる手法で書いていますが、ある意味挑戦でした。建物を中心に、いかに遠い所からどうやって

アプローチするかが勝負で、それがうまくいったので、嬉しかったですね。

「家族じまい」は「ホテルロイヤル」と同じ編集者から、ホテルのその後ではなくて、家族のその後を書いてみませんかと言われて。

私自身は「ホテルロイヤル」というものを書いて、虚構の形というのが見えて満足して



第15回
中央論文芸賞
受賞作

『家族じまい』
桜木紫乃
集英社



第149回
直木三十五賞
受賞作

『ホテルロイヤル』
桜木紫乃
集英社文庫



第7回
新井賞
受賞作

『砂上』
桜木紫乃
KADOKAWA

